

順風満帆の礎

石田退三氏の薫陶を受けて。
順風満帆の礎がここにあります。



昭和30年初期の澤田延夫



創立時の事務所(昭和33年10月)



日本セメント 名古屋包装所



トヨタ車体 富士松工場



豊田自動織機 長草工場



日本電装 安城工場



名古屋大学 豊田講堂

約束された日豊商事の将来

過ぎ去った時代を遡れば順風満帆であったように思える。無論、半世紀に及ぶ社業を回顧するとき、そこには苦難も辛酸もあつたが、それよりむしろ、日豊グループ五〇年の歴史は運命づけられていた、と記したい。

日豊グループの前身、日豊商事は一九五八年一月に日本セメントの特約販売店として産声をあげたが、その布石は、創業者の澤田延夫が若き日にセメント業界に身を置いたことにある。戦後復興の掛け声とともに、ビルや工場の新設が相次ぎ、セメントの需要は拡大の二途を辿りながら、やがて生コン化時代を迎える。そうした業界の変遷をつぶさに見つめる澤田延夫を陰に日向に応援してきたのが、当時、トヨタ自動車工業社長の職にあつた故石田退三氏である。澤田延夫が勤めていたセメント販売会社が廃業した際にも、石田氏はよき理解者として独立を促し、日豊商事創立後は以前にも増して支援を惜しまなかった。

石田退三氏は、「トヨタの大番頭・トヨタ中興の祖」とまで言わしめた人物。「無駄金は、銭も使わない」「自分の城は自分で守れ」が口癖であつたとか。その言葉から、澤田延夫は経営の何たるかを学び、例え規模は小さくても大きな誇りと希望をもつて事業に勤しんだ。ちなみに社名の「日」は日本セメント、「豊」はトヨタ自動車に由来する。

急成長を支えるトヨタとの絆

折しも日本経済は岩戸景気、日豊商事の門出には願つてもない追い風となつた。高度経済成長の波は、トヨタ自動車に積極的な生産設備の増強をもたらし、会社設立の翌月にはトヨタ自動車丸山和風寮の建設用に、バラセメントを約四八〇トン、翌々月には元町工場建設向けに袋セメント約二六万四〇〇〇袋を受注している。続いて翌年には、トヨタ自動車本社事務館新築工事で生コン約二万三〇〇〇立方メートルを初受注した。そうしたトヨタグループの生コン需要に対応する為、日本セメントや名古屋アサノコンクリートに働きかけ、豊田市高岡地区に一九五九年九月生コン工場を完成させた。

こうした黎明期を経て、企業基盤はより強固なものになつていった。それは、トヨタ自動車や同グループで培つた実力を新規取引先の開拓に向けたからでもある。愛知県の指名業者資格を取得して庁舎や鉄道学校、病院などへの建材納入を手がけ、主要セネコンと取引を開始した。生コンの供給不足の際は、沢田商店を一九六三年に発足させ、小野田セメントと業務提携することによつて乗り切つた。

また、「安全の確保」と「事業主の責任」が大きな課題となり、七二年に「安全委員会」を組織し、人命尊重の考えを協力会社も含め広く浸透させることに努めた。



移転事務所(昭和35年3月)



日豊商事 社屋(昭和39年9月竣工)

五〇周年に寄せて

愛知太平洋建設株式会社 取締役 新美 富晴
高校卒業と同時に日豊商事に入社した私にとって、社会人としての勉強は日豊が全てと言えます。現場での立ち会い、電話対応、事務処理などの実務から、営業のあり方や会社のあるべき姿まで教わりました。即決人を育てる、お客様第一、背伸びしない、という教訓は今も大変役に立っています。これからも学んだことを胸にしっかりと張りつめてまいります。

